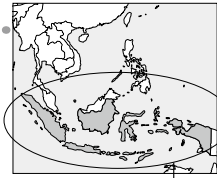


# ユニセフ子ども物語

## 地球に生きる子どものくらし

Republic of Indonesia

## インドネシア共和国

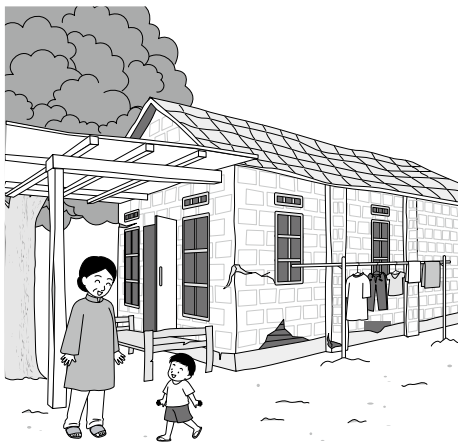


地図は参考のために掲載したもので、国境の法的地位について何らかの立場を示すものではありません。



## 地震をのりこえて支えあう家族

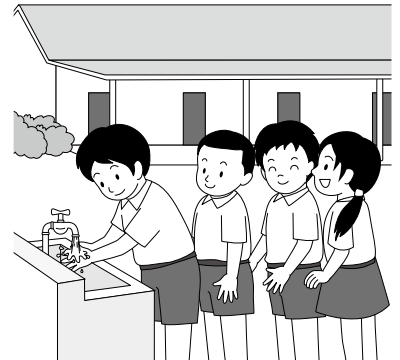
2006年5月インドネシアのジャワ島中部で、マグニチュード6.3の大地震が発生し、多くの人々が犠牲になりました。ジョグジャカルタから車で1時間ほどの距離にあるクラテンで暮らしているサキネムさんは、この地震で夫を亡くしました。サキネムさんの家は、地震で一部崩れましたが、政府からの援助で家は修復されました。鉄筋のブロックでできた家には、台所と寝室、トイレ、井戸があります。サキネムさんは、大豆からつくる乾燥納豆をバナナの葉っぱで包んだ「テンペ」という食べ物を作って、生計をたてていますが、子どもたちを食べさせるのはやっとです。



サキネムさんには4人の息子がいます。22歳の長男ブディさんは苦しい家計を支えるためにジャカルタに出稼ぎに行っています。14歳の次男アンくんは中学生、8歳の三男アブスくんは小学生で、アンくんによく勉強をみてもらいます。一番下のデウィくんは、3歳です。地震が起きたとき、お母さんのお腹の中にいたデウィくんはお父さんを知りません。

三男のアブスくんは、家から歩いて5分ほどの小学校に通っています。地震で小学校は全壊しましたが、NGOによって再建されました。現在、この学校はユニセフからの支援を受け、子どもたちへ配布する教科書やサッカーボールの購入に役立

ています。この学校の周辺地域では、井戸や給水施設はありますが、直接水を飲むことは禁じられています。そのため、子どもたちは家庭で煮沸消毒した水を学校に持参しています。子どもたちは学校で漫画やゲームを通して衛生の知識を学び、家に帰ると、食事の前に手を洗いましょう、トイレのあとには手を洗いましょう、と学んだことを家族に話します。



お父さんが亡くなった後、ずっと落ち着きがなく、わんぱくだったアブスくんですが、この小学校に入学してからは、勉強に集中し、学校で学んだことを家族によく話すようになりました。お母さんのサキネムさんも今まで詳しく知らなかった衛生や病気の予防法などたくさんのお話をアブスくんから教えられています。月に1回は、長男のブディさんも家に戻ってきます。家計は苦しいですが、家族そろっての団らんと子どもたち4人の成長を見るのが、サキネムさんにとって何よりの楽しみです。



物語の国  
インドネシア  
共和国

インドネシアはインド洋と太平洋にわたって3つのタイムゾーンがあり、大小約18,000の島々から成ります。世界で4番目に多い約2億2,800万人の人口を抱えています。1997年の金融危機の影響を大きく受けましたが、その後、個人消費や輸出に支えられ、経済は回復してきました。近年は、地震や津波、洪水などの自然災害やテロ事件に相次いで見舞われています。



◎日本ユニセフ協会  
ジャワ島中部ウォノンボ郊外にあるモスクのある村の風景

病気をこわがらないで  
みんなでもっと話そう！ 知るう！

インドネシアの課題

インドネシアの小学校就学率は全体的に高く、大きな男女差はありませんが、農村部では欠席や退学の割合が高くなっています。また、トイレや洗面所などの適切な衛生施設を利用できる人の比率はわずか52%、妊産婦死亡率は他のアジア地域に比べて高くなっています。地方分権化と民主化への転換により、都市部と農村部の間で拡大した貧富の差はインドネシアの課題です。また、18歳未満の子どもの7%は、暴力、人身売買、労働など子どもの人権の侵害行為に巻き込まれています。2004年のスマトラ沖大地震から約5年が経つ今も、インフラの整備や伝染病対策、生存者への心理社会的支援など復興支援活動にも多くの問題が山積しています。

**インドネシアの状況**  
(よりくわしい統計は『世界子供白書2009』をご覧ください。)

項目	インドネシア	日本
18歳未満の子どもの数(2007年、1,000人)	76,805	21,206
1人あたりの国民総所得(2007年、米ドル)	1,650	37,670
5歳未満児死亡率(2007年)	31	4
妊産婦死亡率(2005、出生10万人あたり)	420	6
初等教育純就学率(男子)(2000-2007年)	97	100
初等教育純就学率(女子)(2000-2007年)	94	100

出典：『世界子供白書 2009』

地域と協力した学習環境づくり

インドネシアでは地方分権下において教育の質を高めようと始まった“Creating Learning Communities for Children”(CLCC)「子どものための学習コミュニティの創造」プロジェクトが成功をおさめています。ユニセフとユネスコが共同で開発したこのプロジェクトがインドネシアの多くの学校で実践されており、学校の自主的運営、活発に楽しく行う効果的な学習、地域社会の参加を促進しています。地域のリーダーや教育省の職員、PTAによる会議や家庭での勉強会が定期的に行われたり、政府からの補助金の活用を委ねられている学校が用途を決め、学校の教師たちへの給料や子どもたちの制服、教科書などの購入に充てています。



◎日本ユニセフ協会  
校内に掲示されている、ユニセフの衛生ポスター。「ハエを食品によせつけないようにしましょう」のメッセージ。

●子どもたちから広める  
衛生の知識

インドネシアにおける水と衛生の環境整備は、特に農村部で遅れています。不衛生な水や環境に起因する下痢や水に関連した病気は、子どもたちの健康にとって大きな障害です。物語に登場するサキネムさん一家の三男アブスくんが通う小学校は、ユニセフの「子どもにやさしい学校」をコンセプトに作られており、衛生の知識を広める活動が盛んです。この学校では、漫画やゲームを使って手洗いを励行する衛生教育を進めています。子どもたちが学校で学んだ知識を家庭に持ち帰り、家族から近所、コミュニティなどの大人たちへも正しい衛生習慣が伝わっています。



◎日本ユニセフ協会  
男女別のトイレの壁に描かれている、手を洗う子どもの絵。校内のあらゆる場所で子どもたちの視覚に訴える工夫がされている。

●世界的流行の中心  
一鳥インフルエンザ対策

インドネシアでは2003年の発生以来、鳥インフルエンザが猛威を振っています。鳥間で感染するH5N1ウィルスが原因でかかる鳥インフルエンザは、致死率が高く、インドネシアでは世界最多の110人以上が死亡しています。犠牲者の約40%は18歳未満の子どもです。収入源である鶏の放し飼いなどによる直接接触が原因に挙げられます。ユニセフは、鳥インフルエンザに関する人々の関心を高め、鳥から人への感染をどう予防するかを喚起するコミュニケーション活動に力を入れています。インドネシア政府は国連機関と協力して2006年からTake Action for Bird Flu(鳥インフルエンザのために行動をおこそう)キャンペーンを始め、子どもたちに人気のテレビ番組のキャラクターを使った漫画や教材を配るなどして、鳥インフルエンザ対策を進めています。



◎日本ユニセフ協会  
鳥はかごの中で飼うこと、野鳥との接触を避けることなど、感染の防止方法をゲームで学ぶ小学生たち。

●オープンなHIV/エイズ教育

HIV/エイズやセックスの話題はタブー視されてきましたが、それによる無視や偏見、正しい知識不足がHIV/エイズの蔓延に拍車をかけています。近年、HIV/エイズの感染が若者の間で増え続けている中で、HIV/エイズに対する認識を高め、正しい知識を得ることが流行を食い止めるための鍵です。ユニセフは、学校、宗教団体、クラブ、子どもや若者のグループなど様々なルートから若者たちにHIV/エイズの教育やアドボカシー活動を行っています。例えば、イスラム教学校の生徒たちがピア・エデュケーター(仲間同士で教え合う者)としてのトレーニングを受け、学校でその知識を歌やゲームを通じて仲間たちと共有します。ユニセフは、病気の予防法を学校のカリキュラムに取り入れるなど、子どもたちが正しい対処法を習得できるように支援しています。



◎日本ユニセフ協会  
HIV/エイズについてのすごろくゲームをする子どもたち。